令和７年度　南 公民館　秋の主催講座

南山手の文学館

昭和１００年でもある今年、昭和の文学と作家たちにフォーカスし、昭和の文学について振り返ります。さらには、２０２５年の今に続く昭和と文学の問題についてもご一緒に考えましょう。昭和戦前および戦中から、それぞれ一作品ずつ、戦後は昭和の終焉にあたり、その総括、集大成として書かれた二つの作品を取りあげて読み深め、考察してまいります。

時　間：13：30～15：30
場　所：南公民館
講　師：上出 惠子 先生
定　員：24 人
受講料：無料
持ってくるもの：筆記用具

日程

回	期　日	学　習　内　容	備考
1	**9/19（金）**	◎開講式・オリエンテーション 〇小林多喜二『蟹工船』（昭和４年） プロレタリア文学の旗手・小林多喜二は、特高の拷問によって絶命しました。衝撃的なその死は中野重治や島木健作等の転向文学を生み出しました。このような多喜二の代表作『蟹工船』を取り上げ、検討します。	準備するもの 筆記用具
2	**10/17（金）**	〇山本周五郎『日本婦道記』（昭和 １７―２１年） 戦時中、多くの女性誌で企画された「名婦」もの。『日本婦道記』もその一つのようですが直木賞辞退にみられるように、そこには時流に左右されない周五郎独自の世界があります。その魅力と重要性に迫ります。	
3	**11/21（金）**	〇田辺聖子『おかあさん疲れたよ』（平成４年） 『感傷旅行（センチメンタル・ジャーニィ）』（１９６４）によって芥川賞を受賞した田辺聖子の戦争と昭和というテーマの集大成『おかあさん疲れたよ』。「私の〈昭和〉報告書」と田辺自身が述べる作品を読み深めます。	
4	**12/19（金）**	〇三浦綾子『銃口』（平成６年） 三浦の最後の長編小説『銃口』は、「昭和を背景に神と人間を書いて欲しい」との要請で生まれました。そこで取り上げられたのは、戦時中の言論弾圧の一つ「北海道綴り方連盟事件」。国家の在り方をも問う作品は今の私たちにとっても切実なものと言えるでしょう。 ◎閉講式	

●申込期間　令和７年８月１日（金）～令和７年８月３１日（日）必着

●申込方法

①電子申請システムによる申し込み

右の２次元コードを読み取るか、長崎市電子申請サービスを検索し「令和７年度秋の公民館講座【長崎市南公民館】」から申し込む。

利用者登録せずに申し込む方はこちらをタップ→利用規約を確認して同意するをタップ→連絡先メールアドレスを入力して完了するをタップ→入力したメールアドレスに届いた URL をタップ→申込の画面に必要事項を記入して確認へ進むをタップ→申込むをタップ→OK→閉じる→申込受付完了メールが届く。

※タップとは指先で軽く画面を叩くことです。

②往復はがき（170円）による申し込み

講座名、住所、氏名、年齢、電話番号、返信用のあて名をお書きください。

③来館による申し込み

返信用はがきをご持参ください。

※応募者多数の場合は、抽選を行い結果をお知らせいたします。

●申込み・問合せ先

長崎市南公民館　〒850-0936 長崎市浪の平町 7 番 19 号
TEL095-825－0295　FAX095-825-0294

※南公民館のその他の情報は　長崎市南公民館　検索